

# 食べること／食べられること

## マーガレット・アトウッド「わんぱくグリゼルダ」の二重性

坪野圭介<sup>1</sup>・今井祥子<sup>2</sup>

### 1. はじめに——織りかさなる二重映しの戦略

『デカメロン・プロジェクト』(*The Decameron Project*, 2020) は、ニューヨーク・タイムズ・マガジン (*New York Times Magazine*) の呼びかけに応じて書かれた、21人の作家による作品を収録した短編小説集である。タイトルからも明らかなように、この企画は14世紀後半にジョヴァンニ・ボッカッチョ (Giovanni Boccaccio) が書いた『デカメロン』(*Decameron*) を下敷きとしている。ペストのパンデミック下、フィレンツェ郊外へ自主隔離中の人びとが語るさまざまな話をまとめた物語集という設定を持つ『デカメロン』にならって、『デカメロン・プロジェクト』は新型コロナウイルスのパンデミック下に書かれた、アメリカ合衆国をはじめとした多数の国の作家による多様な物語をあつめている。21の短編のうち、過去と現在の疫病を重ねあわせる一種のアダプテーションという短編集の企図をもっとも直接的に物語に反映させているのが、カナダの作家マーガレット・アトウッド (Margaret Atwood) の「わんぱくグリゼルダ」(“Impatient Griselda”) だ。この短編は、『デカメロン』最終話の「グリゼルダ」(“Griselda”) のアダプテーションになっている——疫病によって隔離された人びとに、保護者を自任する異星人が「グリゼルダ」と似て非なる物語を語って聞かせるという奇妙なSF作品である。異星人の態度は高圧的であり、発言はしばしば脅迫めくため、人びとの不安と恐怖は次第に高まっていく。本稿では、物語中の「食」の描き方に着目することで、一見すると荒唐無稽な設定を持つこの短編が、いかにしてその設定によってコロナ禍の社会のリアリティを照射しているかを考えたい。

アダプテーションが「他者のものとわかるひとつないし複数の作品を、創造的・解釈的に別の作品に置き換える過程」であるとすれば (Hutcheon 2006: 33)<sup>3</sup>、「わんぱくグリゼルダ」はアダプテーションの理論を何重にも利用した作品だといえる。第一に、ボッカッチョの『デカメロン』全体の枠組み(疫病流行時に避難した人びとの不安や退屈を物語の力で癒そうとするという設定)を再利用しており、第二に『デカメロン』のなかのエピソード

1 和洋女子大学国際学部英語コミュニケーション学科、和洋女子大学大学院人文科学研究科。

2 東京農業大学農学部。

3 拙訳による。以下も同様。

ード「グリゼルダ」を改変しながら利用している。さらに、物語の内部においては、語り  
の手法や登場人物の描き方にも、＜オリジナルと改変を加えたヴァージョンとの関係を提  
示する＞というアダプテーションと同種の原理が見出せる。物語は異星人を語り手とし、  
その語りは「同時翻訳機」によって不完全な英語にたえず変換されていく。「翻訳」の不  
完全さを示す不自然な語彙や表現を文章にふくむことで、英語の背後に異星人の言語が透  
けて「見える」設定になっているのである——こうして作中にあらかじめ取り込まれた架  
空の「翻訳」もまた、「翻案」の一形態だといえるだろう (Walkowitz 2015) <sup>4</sup>。あるいは、  
異星人によって語られる「グリゼルダ」のエピソードには、ボッカッチョの原作にはない、  
グリゼルダが双子の姉妹だという設定が追加されている。原作では一人だったグリゼルダ  
が、原作の従順なキャラクターを踏襲した「ていしゆくグリゼルダ」(Patient Griselda) と、  
正反対の性格の「わんぱくグリゼルダ」(Impatient Griselda) に分裂しているのである。そ  
のようにして、オリジナルの設定や物語、テキスト上の言語、元の登場人物に、それぞれ  
改変を加えたヴァージョンを覆い被せることで、この小説はアダプテーションの原理を物  
語の形式・内容の双方に過剰なまでに適用しているのだ。

それではなぜ、オリジナル／改変版の二重映しが執拗に作品に持ち込まれているのだろ  
うか。そこには新型コロナウイルスの蔓延が関係しているはずである。すなわち、私たち  
の生活に大きな変化をもたらしたウイルスの流行は、否応なく変化の前と後の社会状況の  
両方をつねに想起させる。たとえば私たちは現在、マスクをつけるのが当たり前になった  
生活と、そうではなかったかつての日常とをたえず比較しながら行動しているだろう。つ  
まり、コロナ禍において文字通りの緊急事態を生きる私たちは、「オリジナル」にあたる  
元の生活に、「改変」された異様な生活が覆いかぶさった状態を過ごしている。「わんぱく  
グリゼルダ」という作品は、そのような疫病大流行時の認識の二重性を、アダプテーショ  
ンの原理を通して表現しているのではないか。つまり、「正常」なオリジナル要素と「異  
常」な改変要素をさまざまに重ねあわせることで、コロナ禍以前の「日常」の世界とコロ  
ナ禍以後の「非日常」の世界という二重性がもたらす価値観の混乱を、読者に現実社会と  
別のかたちで経験しなすことを要求しているといえるだろう。

そのように書くと、この短編はきわめて抽象的・記号的な操作を行なった物語に見えて  
くるかもしれない。そうした側面もたしかにあるが、しかし同時にその操作がきわめて切  
実な問いを投げかけているように感じられるのは、そこに生のあり方を根本的に問い返す  
主題がひそんでいるためである。「わんぱくグリゼルダ」は明らかに、人の生の根本を形

---

4 ウォルコウィッツは、「生まれつき翻訳」(born translated) という概念を用いて、あらかじめ翻訳  
を見越して書かれる世界文学時代の現代小説を分析している。この概念のなかには、もともと「翻  
訳として」書かれた——すなわち、ほかの言語で書かれたことを装った——作品もふくまれ、「わ  
んぱくグリゼルダ」もこの分類に当てはめられる。

づくる「食べる」という行為を問題化している。冒頭から、隔離室で人間に対してさまざまな説明を試みる異星人は、自分たちと人類の食文化の違いを強調する。人間たちのために食糧を用意しつつ、「調理」や「ヴィーガン」が自分たちの語彙にないことを説明して、そうした食習慣を否定するのだ。あるいは、異星人が語る「グリゼルダ」のなかに、姉妹が公爵を殺して食べてしまうという、人間の食文化の禁忌を犯す結末をつけ加えている。さらに、物語を終えた異星人は、その衝撃的な結末に納得のいかない人間たちに対して、自らの食欲の対象であることを示唆して黙らせようとする。隔離下の人間は「食べられる」恐怖を味わうことになるのだ。そのように、先に挙げたこの物語の「異常」な改変要素は、みな人間の食文化の構築性を突きくずす方向にむかっていく。それはおそらく、コロナ禍に生じた価値や生活習慣の変化の振れ幅のなかで、生きること＝食べるものの意味が問いなおされていることを、この物語が不合理な設定を通して比喩的に表現しているためである。そこで次節ではまず、コロナ禍において現実の食文化にどのような変化が起きているのかを観察しておこう。そのうえで、具体的にこの短編の「食」の描き方にどのような企みがふくまれ、それがここまで確認してきた二重性とどのように関係しているのかを検討したい。

## 2. コロナとヴィーガン

現在も人類を悩ませている新型コロナウイルス感染症は、一般に動物原生感染症と定義される。人獣共通感染症とも呼ばれ、ウイルスが動物を介して人に広まっていく感染症を指す。2019年12月に中国湖北省武漢市で発表された感染は、1ヶ月後には19カ国に広がり、2023年1月時点で累計感染者数が全世界で6.6億人を突破し、日本国内においては3000万人を突破した(Our World in Data)。しかしながら人類にとって、新型コロナウイルス感染症が動物を介した感染症のはじめての事例というわけではない。1918年に流行したスペイン風邪だけでなく、SARS(重症急性呼吸器症候群)、MERS(中東呼吸器症候群)、鳥インフルエンザ、BSE(牛海綿状脳症)、エボラ出血熱などもまた、動物の利用が人への感染の伝播の一因とされている感染症である。実に、新型あるいは突然変異による人の感染症の4分の3は動物由来であると推定されているのである(Centers for Disease Control and Prevention (CDC) 2020)。

今回の新型コロナウイルス感染症の大流行のなか、ロックダウンや飲食制限などのために飲食産業は深刻な影響を受けた。それだけでなく、人びとは食の認識について大きな変化を迫られることとなった(Janssen et al. 2021: 1)。主要な学説において、ウイルスの起源と人類が現在のような形態で他の動物を利用すること、すなわち動物を支配し搾取することとの関連が明らかにされてきた。さらに、現在の動物利用の形態を続けていけば、今後

も同様の動物原生感染症は増加し流行することが予想される。そのため、将来のパンデミックをどのように抑止するべきかという議論のなかで湧き上がってきたのが、人類は一刻も早く動物搾取をやめ、今後の感染症の蔓延を防止しようという「ヴィーガン（完全菜食主義者）になろう（go vegan）」運動である（Gough, Winters, and Greger 2020, Allen 2020）。

もっとも、ヴィーガニズムは今回の感染症や公衆衛生の問題がきっかけで生まれた新しい生活様式というわけではない。菜食主義的食生活の概念は紀元前5世紀のギリシャとインドには存在していたとされる。あるいは、さらに時代をさかのぼった古代インド文明にすでに実践されていたという説もある（Alam 2020）。用語の出現について注目すると、菜食主義者を意味する「ヴェジタリアン（vegetarian）」という用語は1830年頃より出現した。しかしそれ以前、すでに菜食主義の食事形式を実践していた著名人にイギリス・ロマン派詩人のパーシー・ビッシュ・シェリー（Percy Bysshe Shelley）がいたというのは有名である（白石 2011: 21）。他方、「ヴィーガニズム（veganism）」という用語は1944年、イギリスの動物愛護運動家であるドナルド・ワトソン（Donald Watson）により生み出された造語である。当初はヴェジタリアンのより厳格な実戦形式である、乳製品を食べない菜食主義者を区別するために使われた。その後、一切の動物由来の食事を避けるというより厳格な概念へと意味が変化していった。

1960年代アメリカ合衆国やイギリスにおいて、ヴィーガニズムはカウンターキュージン（反体制的料理）のひとつの要素として取り込まれたり（Belasco 2006: 66）、80年代にはパンク文化などと結びついたりした。それでもヴィーガニズムは社会的にはいわゆるラディカルな少数派であった。しかし、2000年代に入ると、食の汚染に関する事件や食肉産業の実態が徐々にメディアに取り上げられるようになり、ヴィーガニズムは次第に市民権を得ていった。コロナ禍最中の2020年の最初の四半期では、インポッシブルフーズやビヨンドミートといった代替肉製造会社は過去最高の売上額を記録した（Anne 2020）。

一口にヴィーガンといっても、動物愛護のみならず、生態系や環境の保護、自身の健康やライフスタイル、宗教の問題などに至るまでヴィーガニズムの主張する論点は多様で複合的である。また動物由来の商品は、食品だけでなく生活のあらゆる面で広範囲に浸透しているため、突然ヴィーガンになるのは容易ではない。そのため、時間をかけて段階的にヴィーガンに移行していく人も少なくない。特にコロナ禍以前からヴィーガンであった人びとが、コロナ禍での公衆衛生的観点という、ある意味人間中心主義的な立場からのヴィーガニズムの急進的な隆盛の事態をどう受け止めるかについての反応には幅が見られる（Park and Kim 2022: 8）。しかしながら、感染症という、目には見えなくとも、痛みを伴った被害の原因が食肉にあると指摘されたことが、人びとにヴィーガニズムを広める大きな推進力となったことは間違いのないといえるだろう。

### 3. 「食」という問題の射程

「残念ながら、みなさんがヴィーガンと呼ぶような軽食はありません」(“Impatient Griselda,” 69) と、異星人は言い放つ。疫病をひとつのきっかけとして盛り上がるヴィーガニズムが「わんぱくグリゼルダ」の冒頭であっさり否定され、人類が複雑に編みあげてきた食文化は丸ごと無効化されてしまう。アトウッドが「食」を作品のテーマとしたのは、この短編がはじめてのことではない。長編小説第一作である『食べられる女』(*The Edible Woman*, 1969) においてすでに、食べることは支配／被支配関係の中心的なイメージとして用いられ、主題化されている。主人公のマリアン・マカルピン (Marian McAlpin) は拒食症を抱えており、結婚によって規範に嵌め込まれることへの恐怖が、恋人に自らが食べ尽くされるというカニバリズムのイメージを伴って想像されるのだ。『食べられる女』以来、アトウッドは登場人物が直面する「社会的現実」としても、より大きな問題を示すための「比喩」や「象徴」としても、「食」のテーマを作品に利用しつづけてきた (Scats 2000: 4)。「わんぱくグリゼルダ」はまさに、前節で見たコロナ禍におけるヴィーガニズムなどの社会運動化と、より象徴的な次元での捕食関係の変容を同時に視野におさめた物語であり、これまでくりかえし変奏されてきた「食」というテーマの最新形である。

「食べること」がアトウッドにとってきわめて重要な問題であることは、1972年に発表された文学論のタイトルが『サバイバル——現代カナダ文学入門』(*Survival: A Thematic Guide to Canadian Literature*) だったことからもうかがえる。この本のなかでアトウッドは、カナダ文学の課題が、植民地支配の「犠牲者」からの脱却という「サバイバル」を描くことだと述べている。こうした考えの背景には、当時のカナダのナショナリズムの高まりと、第二波フェミニズムの高まりがあったことが指摘されている。アトウッドの意識のなかで、国家・共同体 (カナダ) としてのサバイバルと個人 (女性) としてのサバイバルが緊密に結びつけられていたのであり、やがてアトウッドは両者の土台となる地球環境全体のサバイバルをも重ねあわせるようになる (大塚 2011)。事実、アトウッドは 1970 年代から現在にいたるまで、代表作のひとつ『侍女の物語』(*The Handmaid's Tale*, 1985) をはじめとする多くの作品で、女性の抑圧と共同体による支配をいかに生き延びるかという問題に関連づけて環境汚染の危機を取り上げてきたし、しばしば環境問題と文学の役割について積極的な発言を行ってきた。こうした軌跡を考えると、個人・共同体・地球環境という複数の層をひとつに接着する要素として「食」のテーマが浮上してくることは半ば必然だと思える。食べることは個人が生き延びるもっとも直接的な手段であり、人びとに食べさせることは共同体の政治・経済・文化の力の発露であり、また何をどのように食べるかは食物連鎖という生態系全体のバランスや環境倫理の問題でもある。異なる段階のサバイバルを結びつけるのに、これ以上ふさわしい主題はないだろう。

食べること／食べられることという主題を扱いつつ疫病からの人類のサバイバルを描く「わんぱくグリゼルダ」には、わずか8ページの小品でありながら、アトウッドが探究してきたテーマや手法が凝集している。1節で述べたアダプテーションの利用も、たとえばギリシア神話を巧みに書き換えた『ペネロピアド』(*The Penelopiad*, 2005)などで試されてきた手法であり、SF 的設定やディストピア的世界観もまたアトウッドが得意とする手法である。物語内に利用されるボッカッチョの「グリゼルダ」は貞淑な女性というジェンダー規範を問題化したエピソードだが、フェミニズム文学こそ、アトウッド作品をつねに貫いてきた最大の特徴だ(松田 2020: 11-12)。そして、新型コロナウイルスの大流行は、まさに個・共同体・地球環境のサバイバルを強烈に意識させ、古来からの疫病流行を想起させ、SF 的・ディストピア的状况を現実に呼びこみ、人種や階級のみならずジェンダーの不平等を浮き彫りにした点で、アトウッドが長年にわたって実践してきた創作原理にきわめてふさわしい「題材」となっているのである。そのうえ、感染症の流行と動物を食べることの因果関係、飲食店への影響、食習慣の変化など、さまざまな次元でこの疫病は「食」の問題でもある。そうした事情が、食べることを主題とした「わんぱくグリゼルダ」の物語の背後には横たわっている。あるいは、新型コロナウイルスによるパンデミックとアトウッドの物語との親和性の高さは、アトウッドがフィクションを通じて半世紀前から鳴らしていた警鐘の正当性と、「食」の問題化を重視したアプローチの先見性を裏書きしていると言ってもよいはずだ。

#### 4. 食べることの意味

疫病による感染とは、「境界が無化される事態」であり、「時間的な境界、身分的な境界、自己と他者の境界も侵蝕される」事態である(西山 2014: 239)。はじめに述べたように、いくつもの二重性を帯びた「わんぱくグリゼルダ」は、重ねあわされるふたつのヴィジョンの境界を問題にしているといえるだろう。疫病の流行状態を舞台に据えた物語は、既存の物語の設定・形式や、既存の社会の価値観をさまざまに反転させ、それらの境界を揺さぶりながら中心にある「食」の主題へ焦点化していく。現実社会のコロナ禍における食文化の変化と、徹底して非現実的であるようにも思える「わんぱくグリゼルダ」との関係も、この反転の力学に注目することで見通しがよくなるはずである。

たとえば、この短編のなかで語られるヴァージョンの「グリゼルダ」には、ボッカッチョのオリジナルにはない男女の反転が描かれている。「グリゼルダ」はもともと、侯爵が妻に選んだグリゼルダの愛情を試すために残忍な扱いをくりかえす物語だ。オリジナル版においても物語の最後には、女性にもっぱら従順と服従を求める男尊女卑的なジェンダー観に疑問が差し挟まれるのだが、異星人が語るヴァージョンは別のかたちでジェンダー規範

を反転させようとする。オリジナルには登場しないもうひとりのグリゼルダである「わんぱくグリゼルダ」は、「ていしゅくグリゼルダ」を救うために洗い場を手伝う少年を装う。すると、語り手である異星人は「わんぱくグリゼルダ」を「彼女もしくは彼」と呼ぶようになる(72)。この男女の入れ替えはさらに、姉妹の入れ替わりによって「ていしゅくグリゼルダ」の男装にも拡張する。この挿話は、異星人の視点からすれば、男女のジェンダーの違いが服装の違いによってしか判別できないことを示唆しているだろう。そのように男女の区分が曖昧にされたうえで、グリゼルダが侯爵やその親族を殺して食べるという衝撃的な結末が訪れる。この結末の行動は、男女の支配／被支配関係の反転（それはボッカッチョのオリジナルにおいても一応示唆されていた）をはるかに突き抜けた、いわばジェンダーという文化の範疇外にある振る舞いだ。相手を殺して食べるという究極の復讐に反転することで、男女の不均衡という問題が強制的に無効化されてしまうのである。

そのことはさらに、動物と人間の境界の侵蝕、両者の立場の反転にもつながっている。エピソード中、調理場で「わんぱくグリゼルダ」が目にする「皮」や「脚」や「骨」(72)と死んだ侯爵とは、「食べられる動物」としてまったく同じ視線で捉えられていた。種の違い、男女の違いなどの差異が、いずれも消し去られているのである。物語内物語の外側でも事態は変わらない。現実社会において、人間による動物の支配と搾取が問題視されてきていることを2節で述べたが、アトウッドの短編のなかでは、人間の側が異星人によって支配を受ける危機に立たされている——しかもその異星人は、人類が好んで食べてきたタコのような見た目をしていることがわざわざ語られるのだ（「ええ、知っていますよ、私はあなた方がタコと呼ぶものに似ているでしょう」[69-70]）。異星人の任務はあくまで疫病からの人類の保護だと説明されるが、隔離された無力な人間と衣食住をまるごと取り仕切ろうとする異星人との圧倒的な力関係の差は、「保護」と「支配」がほぼ同義であることを物語っている。事実、「芸人」を自称する異星人の指示は、しばしば脅迫的なトーンを帯び、人間が捕食の対象になりうることを示唆する（「泣き言をいわれて大変いりましたし、むろん食べちゃいたくもなりました」[76]）。タコに似た異星人と人間のこうした力関係の表現は、人間と動物の支配／被支配関係を反転させたものだといえる。その反転は、支配対象・捕食対象としてきた動物に牙を剥かれるかのように、動物由来の疫病に苦しめられる現実の人間社会の風刺としても機能しているだろう。

そして、男女の区別の無化から、人間と動物の逆転へと進んだ境界の破壊、最終的に現実社会の食文化の反転に結びつく。人びとが動物の搾取をやめる手段のひとつがヴィーガニズムであるとするならば、「わんぱくグリゼルダ」はその運動を逆向きに利用している。物語の序盤で、異星人は「軽食」を人間に提供するが、「調理」という概念も「ヴィーガン」という概念も持たない。具体的にどのような食べ物が与えられたのかはこの場面に書かれていないが、「軽食をまるごと消化器官——あなた方が口と呼ぶもの——に放り込めば、

床に血がこぼれることもありません」(69)という異星人の説明から考えられるのは「動物」の生肉である。つまり、コロナ禍に食肉を避けるヴィーガニズムが隆盛した現実を反転させたかのように、作中の人間は生物をそのままの姿で食べることを突きつけられるのだ。さらにその後、異星人が語って聞かせる物語の結末で、先述したようにグリゼルダ姉妹が公爵と親戚たちを殺して食べてしまう。異星人は、侯爵たちを食べる行為が「自分自身も同じ立場であればするであろうこと」(76)だと語り、非常事態であればカニバリズムという禁忌も許されるという価値観を人間たちに受け入れさせようとするのである<sup>5</sup>。そこから翻って考えると、物語冒頭で異星人が人間に与えていた「軽食」も、人肉だったのではないかと——あるいは少なくとも、人肉であってもなんら不思議はないはずだと——推測できる(だからこそ、物語の結末を聞いた人びとは絶句したのだろう [76])。つまり、異星人が伝統的な物語「グリゼルダ」を改変して人びとに語りなおした意図は、物語の「教訓」を通して人間たちに共喰いを示唆するためだったと考えられるのだ。もちろん、異星人のメッセージは幾通りにも解釈できる。「軽食」として差し出された肉は、疫病が他の動物を食べる習慣に起因しているのなら同じ種である人間を食べればよいという、ヴィーガニズムの論理の一部を利用しつつ反転させた皮肉な提案でもあり、自分の命令に従わなければ食べられる側になるのだという異星人から人間への警告でもあり、動物の捕食者として振る舞ってきた人間が動物由来と考えられる新型コロナウイルスの「被食者」になった構図の象徴でもあるだろう。

コロナ禍はたしかに人びとの食文化のあり方を変えた。その変化のなかには、2節で述べたような肉食の忌避もあれば、「黙食」や「孤食」の推奨による食を伴うコミュニケーションの制限、飲食店の開店時間の短縮、取り分けの禁止やアクリル板で仕切られた食卓のような、食事作法・人間関係の変容もある。アトウッドが作中に描くカニバリズムの推奨という食文化の変化は、やはり疫病が流行したことの帰結ではあるが、現実の変化とは正反対のものである。しかしそのようにして描かれた反転の異様さによってあらためて認識させられるのは、食という行為が、異星人が推奨するように単に栄養を摂取するため、生き延びるため、本能的欲求を満たすためのものではなく、先に見たヴィーガニズムの歴史が示すように文化的・社会的な積み重ねのうえに構築されているという事実だ。その事実は、男女のジェンダーやその不均衡が構築的に積みあげられてきたものであるゆえに、異星人からは正しく認識されないことと並行して理解される。アトウッドの短編は、そのような気づきを、現実をはるかに突き抜けた極端な変化に振り切ることで強調させている。

---

5 厳密には、非常事態での食人はカニバリズムとはみなさない場合も多いが(高井 2000: 58)、本稿では食習慣自体の変容(の可能性)を論じているため、カニバリズムの語を用いることとする。

## 5. おわりに——ウイルスと異星人

世界規模で人びとのそれまでの日常生活をストップさせてしまった新型コロナウイルスは、たとえば繊細さというイメージを付与された結核のような感染症と違い、かつてスーザン・ソントグ (Susan Sontag) が「隠喩としての病」と呼んだ文化的意味づけが成り立たないウイルスであることが指摘されている (福嶋 2021: 333-334)。このウイルスが破壊しようとしている、あるいは再考を迫ろうとしているものは、生物的な人間の健康や生命だけではなく、人類の長い歴史のなかで築かれてきた文化・社会の意味づけそのものなのだ。その点を踏まえると、作中で異星人の存在が何を表象しているのかも見えてくる。人間たちを支配に似たやり方で隔離し、あわよくば捕食しようとし、あらゆる境界を無化して文化や歴史的な価値づけをほどいてしまう異星人こそ、まさしく新型コロナウイルスの似姿なのである。物語の最後で、ドアの下のわずかな隙間から流れるように脱出していく異星人は、目に見えない隙間からも侵入してくるウイルスの姿を思わせる。なにより、男女の区別ができないことを強調して人間を「淑女あるいは紳士」と呼び、動物の肉と人間の肉さえも区別せず捕食対象とする異星人の徹底した「無差別」あるいは「平等」は、宿主とする人を選ばないウイルスの「無差別」・「平等」とまったく同じ性質である。異星人が示す「無差別」と「平等」こそが、物語内でジェンダーの不均衡を破壊するかと思えば、肉を食べない (あるいは、肉は食べるが人間は食べない) といった食文化の境界をもことごとく破壊してしまう。ウイルスが人間の規範にとっての他者であるのと同様に、異星人も地球人の規範にとってまったくの他者であるからだ。

現実においてきわめて身近な宿敵となった新型コロナウイルスと、非現実の彼方にいて一見すると庇護者でさえあるはずの異星人というかけ離れた存在とを結びつけることで、アトウッドはこれまでに見てきた反転の原理をもっとも大きな振幅で利用している。その反転は、人類が手懐けてきた (と思われた) 動物やウイルスや自らの規範が、その実きわめて不安定かつ一時的な秩序のなかにかろうじて押しとどめられていたに過ぎないことを私たちに思い知らせるだろう。地球の保護者／支配者であったはずの人間も、簡単に被保護者／被支配者の立場に入れ替わってしまう。これまでの秩序が取り払われた状態に、何らかの救いがあるのか、禍いだけが残るのか、異星人が人びとを置き去りにして別の隔離集団のもとへ去っていく結末からは見通せない。ただし、二重のヴィジョンがたえず反転したり、浸透しあったりする運動のなかには、この物語が表現する強烈なディストピアとは異なる、解放の可能性のようなものがときおり垣間見えもする。境界の侵犯や無効化によって現前する光景の九割が異星人＝ウイルスがもたらす絶望であるとして、残りの一割は同じ異星人＝ウイルスが規範や抑圧を強制的に取り払うことであられる希望である。カリ・ニクソン (Kari Nixon) が述べているとおり、疫病 (アトウッドの物語のなか

では異星人)は「階級や人種、性的指向、国籍など、人が自分たちのあいだに築いてきた偽りの差異、自分と他人を隔てていると考え、しばしば他人の優位に立つことを正当化するのに使ってきた差異の嘘をすべて暴く」(209)からだ。その小さな希望のなかにこそ、読者はパンデミックからのサバイバルを、平等な社会への前進を、動物倫理のあるべき姿を、そして生態系との関係をより良く築く道を、かろうじて夢想する。換言すれば、この物語が提示する「食」にかかわる二重のヴィジョン、すなわち食べること(捕食)／食べられること(被食)、あるいは食べること(カニバリズム)／食べないこと(ヴィーガニズム)の巨大なマトリクスのどこかに、より良く食べてより良く生きる道がかすかに見え隠れしているはずなのである。

#### 参考文献

- Alam, Anam. 2020. *The History of Veganism: Know your Roots*.  
<https://theveganreview.com/the-history-of-veganism-know-your-roots/> (Accessed January 24, 2023)
- Allen, Elisa. 2020. “The best way to prevent future pandemics like coronavirus? Stop eating meat and go vegan | View,” *Euronews*, April 2,  
<https://www.euronews.com/2020/04/01/the-best-way-prevent-future-pandemics-like-coronavirus-stop-eating-meat-and-go-vegan-view> (Accessed September 28, 2022)
- Anne, Marie. 2020. *The COVID-19 pandemic: an opportunity to go vegan?*.  
10.13140/RG.2.2.14333.38885.
- Atwood, Margaret. 1972. *Survival: A Thematic Guide to Canadian Literature*. Anansi.
- . 2020. “Impatient Griselda” In *The Decameron Project: 29 New Stories from the Pandemic Selected by the Editors of the New York Times Magazine*. New York: Scribner, 67–76.
- . 1969. *The Edible Woman*. McClelland & Stewart.
- Belasco, Wallen J. 2006. *Appetite for Change: How the counterculture took on the food industry*. Ithaca: Cornell University Press.
- CDC.gov. “Zoonotic Diseases.” <https://www.cdc.gov/onehealth/basics/zoonotic-diseases.html> (Accessed September 28, 2022)
- Frontiers in Nutrition*, 8 (2021), Article 635859. <https://doi.org/10.3389/fnut.2021.635859> (Accessed September 28, 2022)
- Gough, Andrew, Winters, Ed & Greger, Michael 2020. “COVID-19 COVID-19 and animal exploitation: Preventing the next global pandemic.” *Surge*. <https://www.surgeactivism.org/covid19> (Accessed September 27, 2022)
- Hutcheon, Linda. 2006. *A Theory of Adaptation*. London: Routledge.
- Janssen, M, Chang, B.P.I., Hristov, H., Pravst I., Profeta, A., and Millard, J. “Changes in food consumption during the COVID-19 pandemic: Analysis of consumer survey data from the first lockdown period in Denmark, Germany, and Slovenia.”
- Our World in Data. “Coronavirus /Pandemic (COVID-19).” <https://ourworldindata.org/coronavirus> (Accessed January 21, 2023)
- Park, Eunhue, and Sung-Bum Kim. 2022. “Veganism during the COVID-19 pandemic: vegans’ and nonvegans’ perspectives.” *Appetite* 175, Article 106082.  
<https://doi.org/10.1016/j.appet.2022.106082>. (Accessed September 28, 2022)
- Sceats, Sarah. 2000. *Food, Consumption and the Body in Contemporary Women’s Fiction*. Cambridge: Cambridge University Press.

Walkowitz, Rebecca L. 2016. *Born Translated: The Contemporary Novel in an Age of World Literature*. New York: Columbia UP.

大塚由美子. 2011. 『マーガレット・アトウッド論——サバイバルの重層性「個人・国家・地球環境」』彩流社.

白石治恵. 2011. 「シェリーと食——「シェリー＝熱心な菜食主義者」への疑問——」『酪農学園大学紀要』35(2): 21-27.

高井哲彦. 2000. 「食の透視画法(6): カニバリズム・文学・社会科学」『しやりばり』(223): 58-59.

ニクソン, カリ. 桐谷知未訳. 2022. 『パンデミックから何を学ぶか——子育て・仕事・コミュニティをめぐる医療人文学』みすず書房.

西山けい子. 2014. 「疫病のナラティブ——ポー、ホーソーン、メルヴィル」中良子編『災害の物語学』世界思想社.

福嶋亮大. 2021. 『感染症としての文学と哲学』光文社.

松田雅子. 2020. 『マーガレット・アトウッドのサバイバル——ローカルからグローバルへの挑戦』小鳥遊書房.